神戸女子大学看護学部紀要　第４巻，61-64，2019年３月

◆報告

第４回　神戸女子大学看護セミナー報告

Report of 4rd Kobe Women's University Nursing Seminar

魚里 明子　笹谷 真由美　馬場 敦子　菅野 由美子
溝畑 智子　鷲田 幸一　植田 奈津実

Akiko Uozato, Mayumi Sasatani, Atsuko Baba, Yumiko Kanno
Satoko Mizohata, Koichi Washida, Natsumi Ueda

Ⅰ．はじめに

神戸女子大学看護学部看護学科は，2015年４月に開設し，今年完成年度を迎えた．本学では，開学時からコミュニティ・オブ・プラクティス（以下COP）の概念を基に，１年生から４年生が小グループで一緒に学ぶ「学びのグループゼミ」を取り入れ，学年を超えて学び合っている．COPとは，「あるテーマに関する関心や問題，熱意などを共有し，その分野の知識や技能を，持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」（E, Wenger，1999／野村，2002）のことである．毎年開催されている看護セミナーでは，本学科の特色であるこのCOPの学びを深めている．

今回は，看護学研究科看護学専攻博士前期課程及び博士後期課程の設置が認可されたことより，神戸女子大学看護学研究科開設記念のセミナーとして，村上 陽一郎先生を講師にお招きし，コミュニティ･オブ･プラクティスを看護の実践科学の視点からご講演いただいた．次世代の看護を担う教育者・研究者の育成を目指す看護学部に合った看護セミナーとなったので，ここに報告する．

Ⅱ．看護セミナーについて

１．テーマ

「コミュニティ・オブ・プラクティス－実践科学としての看護学に期待すること－」

２．開催日時・場所

2018年９月１日（土）　13:30～16:00

神戸女子大学ポートアイランドキャンパス　Ｆ館３階F304講義室

３．内容

・開会の挨拶

・特別講演

「実践科学としての看護への期待」

講師：村上 陽一郎先生（科学史家・科学哲学者）

前東洋英和女学院大学学長

東京大学・国際基督教大学名誉教授

・対談　村上 陽一郎先生　× 野並 葉子学部長

・閉会の挨拶

４．講演内容

科学史家・科学哲学者で前東洋英和女学院大学学長，東京大学名誉教授，国際基督教大学名誉教授の村上陽一郎先生から，「実践科学としての看護への期待」と題してご講演いただいた（詳細な内容は，別稿「特別講演　実践科学としての看護への期待」を参照）．自然科学者が社会の中でどのように生まれたのか，社会的効力を認知されていなかった科学が次第に社会の中で一定の役割を担うようになってきたという歴史から，科学をどう捉えるかについてが伝えられた．また，医学は科学であるが，患者というクライエントが存在する点，また医療者・患者の心理的な要素が影響を及ぼす点が他の科学と異なり，医療はトランス・サイエンスという概念で捉えることができるということが説明された．科学だけでは正しい答が導かれない領域，トランス・サイエンスである医療において，答えの出ないことに対して耐える力，ネガティブ・ケイパビリティが求められることが伝えられた．他者をどう理解するかという答えの出ない場面においては，共感（empathy）が重要になってくること，患者が語る物語を共有することが重要であることが伝えられた．またオンライン・コメンタリーとして，患者側も医療者の物語を共有していくことの必要性についても伝えられた．共感は，意図的に企てられた患者・

神戸女子大学看護学部看護学科
Kobe Women's University Faculty of Nursing

家族の理解ではないこと，根源的な，人間の魂の奥底にあるものが発露のように湧き出てきたものであることが，看護学生のエピソードから伝えられた．医療は，病気を治す，病気の苦しみを取り除くことだけでなく，患者の死に対しても関わらなければならず，その場においても共感や物語の共有が重要になってくると説かれ講演を終えられた．

写真１（特別講演の様子）

５．対談

講演後，村上陽一郎先生と野並学部長との対談で，「科学」と「実践」という視点で「看護」について意見が交わされた（詳細な内容は，別稿「対談」を参照）．

写真２（対談の様子，左：村上陽一郎先生，右：野並葉子学部長）

６．第４回神戸女子大学看護セミナーについてのアンケート調査結果

1）アンケート調査の目的と実施方法

第４回看護セミナーの評価と今後の実施に対する要望等を把握することを目的に，参加者を対象としたアンケート調査を行った．アンケート用紙は，講演資料とともに参加者全員に配布した．質問項目は，回答者の年代，職種，就業場所，特別講演・対談の満足度とその理由，看護セミナーの開催時期と周知方法について，今回の看護セミナーについての意見や感想，今後の看護セミナーへの要望や希望するテーマについてである．満足度に関しては，5が「とても満足」，1が「不満足」の５段階評価とした．

2）アンケートの回収率と回答者の属性

アンケートは看護セミナー参加者80名全員へ配布し，回収は49部，回収率は61.2%であった．回答者の職種は，教員22名(45%)，看護師・保健師・助産師10名(20%)，学生14名（29%），その他２名（4%），無回答１名（2%）であった．就業場所は，教育機関24名（49%），病院３名（6%），行政機関１名（2%），その他２名(4%)，無回答19名(39%)であった．（表１）

表１．回答者の属性　　n＝49

項目	内訳	人数(n)	(%)
職種	看護師・保健師・助産師	10	20
	教員	22	45
	学生	14	29
	その他	2	4
	無回答	1	2
就業場所	病院	3	6
	教育期間	24	49
	行政機関	1	2
	その他	2	4
	無回答	19	39

3）看護セミナーに対する満足度

（1）特別講演の満足度

村上陽一郎先生による特別講演の満足度は，満足度４が31名（63%），満足度５が17名（35%），満足度２が１名（2%）であった（図１）．満足度の選択理由について，自由記載された内容をカテゴリー化したものを表２に示した．満足度が高かった理由として，「科学の位置づけや，科学の中の医療や看護の位置づけなどの根源的なことが理解できた」「看護学という学問の原点にふれたように思う」「ネガティブ・ケイパビリティや共感，ナラティブアプローチについても理解を深められた」といった，【看護学・科学の根源的な内容で理解を深めることができた】ことや「今後の看護師としての将来を考えるきっかけになりました」と

いった【今後に活かしていきたい内容であった】ことが挙げられた．

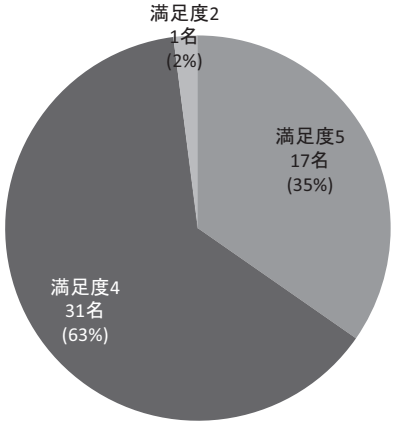

図１　特別講演に対する満足度

表２．特別講演の満足度の選択理由カテゴリー

○看護学・科学の根源的な内容で理解を深めることができた	(6)
○今後に活かしていきたい内容であった	(2)
○看護学を科学としてどう捉えていくのかが分かる内容であった	(2)
○もう少し聴きたかった	(1)
○内容が難しかった	(3)

※（　）内は記入者の延べ人数

(2) 対談の満足度

対談の満足度は，満足度４が 27 名（55%），満足度５が 18 名（37%），満足度３が３名（6%），無回答が１名（2%）であった（図 2）．満足度の選択理由について，自由記載された内容をカテゴリー化したものを表３に示した．満足度が高かった理由としては，「看護学の大きな視点を学び考えさせられた」「“看護学”はどういう方向に進むのか，看護学とはどういうものなのかということについて考えさせられた」「看護学の発展していく中で根本にある問題だと思った．とても考えさせられました」という【看護学について深く考えさせられた】という意見が多かった．一方で,「マイクの調子なのか，声がよく聞こえなかった」「少し聞こえづらかった」といった【マイクが聞こえづらかった】という環境に関する意見もあった．

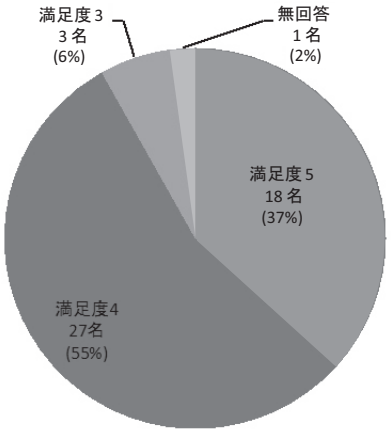

図２　対談に対する満足度

表３．対談の満足度の選択理由カテゴリー

○看護学について深く考えさせられた	(6)
○特別講演の内容を深められた	(1)
○もう少し聴きたかった	(2)
○難しかった	(1)
○マイクが聞こえづらかった	(2)

※（　）内は記入者の延べ人数

(3) 看護セミナーの開催時期

看護セミナーの開催時期については，「とても適当」が 21 名(43%),「どちらかといえば適当」が 28 名(57%)であった．

(4) 第４回看護セミナーに対する意見や感想

20 名（40%）の回答者が看護セミナーに対する意見や感想を記述していた．「看護について違った視点で考えるきっかけになりました」や「知的好奇心（科学とは何か　看護学とは何か）をとても刺激された．」「実践科学という見方があることを知れました．」「共感について，再現性について，看護への問いかけについて，非常に刺激されました」といった考える機会になった，学びを得られたという意見が多く記されていた．

(5) 今後の看護セミナーへの要望や希望するテーマ

この項目に対する記述内容は，「今回のような根源的な内容をテーマとしたものが良い」といった，学問的な根源的内容・テーマを要望する意見と，「臨床からの参加も増えるような内容になると良い」,「教育機関のみでなく臨床側も協働していけるようなセミナー

になると良い」といった臨床の方と共に学べるテーマ・セミナーを要望する意見があった．

4）アンケート結果からみる第4回神戸女子大学看護セミナーの評価と今後の課題

今回の第4回看護セミナーでは，神戸女子大学看護学研究科開設記念ということもあり，実践科学としての看護学について考えるため，科学史家・科学哲学者である村上陽一郎先生をお招きし「実践科学としての看護への期待」をご講演いただいた．科学の成り立ちから，科学や技術だけでは正解を見つけることのできないトランス・サイエンスについて，また答えの出ない事態に耐える力としてのネガティブ・ケイパビリティという概念を紹介してもらい，また共感の意味やそれがもたらした効果などから，医療とは看護とはどうあるべきかを考える機会となった．アンケート結果からも，科学・看護学について根源的なところから再び考え理解を深めることができたとの意見が複数あり，テーマに即した特別講演になったと考えられる．今回のセミナーは学生の参加も多く，学生にとってはやや抽象度の高い講演であったため，理解が難しい部分もあったようであるが，それでも今後の看護を考えていくきっかけとなった等，理解には至らずとも講演から得られたものはあったように思われた．

対談では，村上陽一郎先生と野並学部長が看護学・看護を改めてどう考えるかということについて意見が交わされたが，こちらも特別講演の内容をさらに深める，また看護学について改めて考える良い機会になったと思われる．

神戸女子大学看護セミナーがCOPとして学びの場になることを目的としている点を鑑みると，参加者が特別講演・対談を通して，何らかの学びを得られたと実感していることは，看護セミナーの目的をある程度果たすことができたと評価できる．一方で，「もっと時間をかけて聴きたかった」「マイクが聴こえづらかった」という意見もあったことから，構成や会場の設定などはが今後の運営上の課題として挙げられる．

看護セミナーの開催時期やテーマに関しては，参加者のニーズに合ったものであったと評価できる．今年度は教員の参加者が多く，病院医療職や地域医療職者，介護・福祉関係者の参加が少なかった．テーマとして，実臨床に馴染みがないものであった可能性があり，アンケートにもあったように今後は大学教育・研究者と臨床家が共に学べるセミナーを開催していくことも課題として挙げられる．

Ⅲ．おわりに

第4回看護セミナーでは，特別講演や対談を通して，看護を「科学」と「実践」という視点から学ぶことができた．今後もCOPについて学びを深め，教育研究に取り入れ，また臨床でも取り入れていけるよう発展させていきたい．

演者として専門分野の異なる参加者に，大変分かりやすくご講演いただき，また相次ぐ質問に一人ひとり丁寧にお応えいただきました村上陽一郎先生をはじめ，参加者の皆さま，準備・運営に参画していただいた看護学部教員各位に，この場を借りて心から感謝申し上げる．